



発行所 秋田魁新報社  
〒010-8601  
秋田市山王臨海町1番1号  
©秋田魁新報社 2011年

# 対話 会話

秋田の皆さんにとって、

「森は陸上の森しか意味しないかもしれないが、海と暮らしてきた私には、「海の森」つまり、水産増殖に役立つ大型海藻の森があります。窒素やリン、二酸化炭素(CO<sub>2</sub>)を吸収して酸素を排出し、海の生物の付着基盤となり、地の生物多様性を豊かにし、産卵場や揺籃場ともなります。戦後、これらは埋め立てや護岸、不適切な排水で破壊され、沿岸は磯焼けになり、赤潮の被害も減らず、漁民数も漁獲量も減っております。

一方、中国は1980年当時の280万トの沿岸漁獲量を、ピーク時の98年までには1336万トに伸ばしました。しかし、乱獲が顕著となり、中国政府は、99年に捕獲漁業「ゼロ成長」増産抑制策を打ち出し、近海漁業資源の保護と持続的発展に向けて動

き、海藻養殖を強化しました。

その結果、沿岸漁獲量は、その後1200万ト強に落ち着いています。また、この80年代の沿岸漁獲量の増加は、コンブなど日本から輸入された海藻養殖技術に基づく養殖生産量の増加と非常に高い相関関係にあります。つまり、海藻養殖の増殖効果が想

## もう一つの森づくり

まつだ 恵明

定されます。このようにして水産大国中国が新しく誕生しました。

残念ながら、日本には海藻養殖の増殖効果を考える人があまりおりません。2009年の中国の海藻養殖生産量は1千万ト余、沿岸漁獲量は1260万トですが、日本の海藻養殖生産量は、たった46万

ト(戦後ピーク時で60万ト弱)、沿岸漁獲量は129万トでした。

私は、「海の森づくり」の仕事に、1994年から関わっており、定年退職後、妻の実家がある秋田にきました。秋田で何かできないかを考えていたとき、秋田県、男鹿市、男鹿森林組合主催の「ハタハ

タを育むエコの森づくりに参加しませんか？」に参加しました。その時に、男鹿のギバサ生産が話題となり、これなら、私も何かできるのではと考えました。そんな中、今年3月に東日本大震災があり、三陸海岸の水産業が大打撃を受けました。秋田県としては、ワカメの生産倍増政策

を打ち出しました。私たちのところにも秋田県のために何かできることはないか...と共通の意思を持った人たちが名乗りを上げ集まって来ております。

私たちの海の森づくり支援事業は、種糸や海洋施肥剤等資材のあっせんと、自力更生を中心とした漁村地域活性化に関する勉強会の開催です。

これまでの経験から、鹿児島県錦江湾以北の漁協では、大型海藻コンブ促成栽培種の冬の養殖は可能で、半年で1枚100〜200g(湿重量)

のコンブが生産されます。コンブを養殖すればアカモクなど天然の藻場が回復してきた長崎県壱岐東部漁協の例も経験しております。海藻養殖と海洋施肥を組み合わせて、海の森づくりを契機に勉強会を開催し、多面的機能を持つ漁村の第6次産業化を図ることができれば、「海」は「宝の

海」に変わり、雇用機会は生まれ、漁村は活性化し、過疎から脱却できると信じております。東日本大震災や東京電力福島第1原発事故を経験して、森、川、海、国土は循環システムであり、これを一体として考える時代になりました。

日本の特徴は、海です。特徴を生かさずして、日本の将来はありません。漁村の活性化は、海を生かさず最重要課題であり、国民の責任でもあります。秋田県の特徴は第1次産業です。秋田魁新報の読者の皆さん！秋田県を自然との共生を目指す第1次産業を中心とした第6次産業基地に育て上げ、起死回生を迫られている日本の魁を指さそうではありませんか？

(秋田市、鹿児島大学名誉教授、NPO「海の森づくり推進協会」代表理事、71歳)